
けいおん！先輩とあずにゃん

小日向 湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！先輩とあずにゃん

【NNコード】

N6473Z

【作者名】

小日向 湊

【あらすじ】

唯梓の短編4作品をまとめたものです。拙い文章ですが、少しの間お付き合いいただければと思います。

1：冬の日、アナザース前

天秤、と言うばかりがある。

それは対象となるふたつの物をそれぞれの受け皿へと乗せ傾き加減で比重を調べるアイテムであり、またそれは物事の比較にも比喩的な意味合いにしてしばしば利用され、より重力に従つた受け皿の柄をヒトは重要と位置付けてその皿に乗せた物事を遂行する。

その日、中野梓は嘘をついた。

それは些細な偽りであったが、つかなくてはいけない言わば必要悪の様なものだった。

彼女には一般的に「彼氏」と呼ばれる存在があった。故に聖なる夜に彼等が時間を共有するのは至極当然の話なのである。クリスマス会を開こう、と提案して下さった軽音部の諸先輩方には大変申し訳ないのだが、普段から共に過ごす時間を制限される理由の一端でもある部活動に関する事項は、悪いがその日ばかりはすっかり忘れていたかったのだ。

「彼氏ですよ奥さん」

「若い子はいいわねえ」

一学期の終業式が終わつた後の部活動の席で、クリスマス会には参加出来ない意向を伝えた梓に対し、それを茶化す平沢唯、田井中律の両先輩の会話に、

「ち、違います！ 家族と過ごすんです！」

と顔をほんのり朱に染めた梓がした反論。それは、恐らく特定個人がいらっしゃらない先輩方への配慮半分、單なる恥ずかしさ半分と言つたところか。だけどそれは、イコール桜高軽音部のメンバーが嫌いと言つ事では無いと、いまの梓なら胸を張つて言えるだろう。だから唯が出したクリスマス会の代替案である年末パーティーには参加の意を表明したのだ。彼との初詣は、あくまで先約の存在を秋山澪先輩か琴吹紬先輩に話せば、パーティー中でも抜け出す事は可

能だらう。梓はそんな事を考えていた。

軽音部と彼氏、梓はそのそれを年末と言つ天秤の違つ皿に乗せてみる。すると傾き方は、あくまで彼氏が優勢だったのだ。しかし実際に乗せる事が出来たなら、それはほんの僅かで、幾許の差も無かつた事だらう。

きっと。風が吹けば、それに煽られてその立場が逆転してしまつ位の、微妙な差

部活が終わつて帰宅した平沢唯は、早くも年越しのパーティーを見据えていた。

「ただいま」

と言つが早く既に帰宅している妹の憂に年末、軽音部の仲間が泊まりに来る事を告げた。

「そりなんだ、楽しみだね」

憂にとつても馴染みある軽音部のメンバーと一緒に年を越せる事に、彼女も多少ならず嬉しそうな顔をして見せる。

「でもさあ、ほんとは去年みたいにクリスマスパーティーを開いつて言つたんだけど、あづにゃんがその日は無理つて言つから年末になつちゃつたんだよねえ」

すると「あはは」と笑つ唯とは対称的に、憂は至極真面目な顔をした。

「そつかあ、そうだよ……」

刹那、平沢憂は固まつた。それは端から見るならば『言つてはいけない事を口にした時の反応』に近いものがあると言えるだらう。

しかし憂にとつては残念な事に、唯はそれを見逃さなかつた。

「え？」

口の先ではおどけながらも、唯のその瞳は少しばかり不適に微笑んでいる。

「え？」

対照的にこちらは口の先ではおどけながらも、憂の瞳は笑う事を知らずに右往左往をし始めた。

「な、なんでもないんだよ？」

慌ててそう言つた憂だが、そのセリフが火に油を注ぐ発言である事には、誠に残念ながらその言の葉が口を離れて後、実姉の目が爛漫とし出した時に気が付いた。墓穴を掘つた、と思つた時にはもう遅かつたのだ。

「なんでもないならそんなに慌てないよねえ？」

完璧超人がたまに見せるドジっ娘属性と、天然が天文学的確率で見せるピカイチの閃きが同時に起こつた瞬間である事は、もはや言うまでも無いだろう。

「あずにゃん、もしかして彼氏がいるの？」

遠慮無く核心を付く唯に、憂は観念した様子で頭を一度上下に振つた。

梓ちゃん、ごめんなさい……内心そう思いながら。

「知られちゃつたからには……もつと知りたがるお姉ちゃんの事だし話すけど、ほんとは口止めされてるんだから他の人には絶対に言つちゃダメだよ？」

心配そうにそう口を開いた憂に、唯は「うん、うん！」と目を煌めかせながら文字通りの二つ返事で了承する。心配には変わり無いのだが、約束はきちんと守るお姉ちゃんの事だから、と憂は信じて話し始めた。

「ええと、実は梓ちゃん、中学の時から付き合つてる彼氏がいるみたいなの。名前は教えてもらつてないからわからないんだけど、同じ年で近くの高校に通つてるみたいなんだ」

「ふむふむ」

「いつだつたか梓ちゃんの生徒手帳を拾つた時に、不可抗力で二人が一緒に写つてて写真を見ちゃつたのが梓ちゃんにバレて。初めは梓ちゃん、顔真っ赤にして怒つてたんだけど、気が付いたら彼氏さ

んの事も普通の会話に登場するようになつてたな

「あづにやん、部活じゃそんな素振り全然見せないのにな」

梓の意外な一面に、唯は正直驚いていたのだ。

「多分知られたく無かつたんじゃないかな？ 恋は恋で部活は部活でつてケジメをつけてたみたいだから」

「と言うよりは」

唯が口を開く。

「部活で言つたらいつちゃんにネタにされちゃうからかもよー？」

「あ、ははは」

苦笑いしながら憂は、部活で口に出来ない理由が律さんも去る」とながら我が姉にある事は言い出せずについた。

『ほんとに誰にも言わないでね？ 特に唯先輩には絶対だよ？』過去に梓に言われたセリフが憂の頭の中で響く。田頃から不本意なあだ名と過度なスキンシップで自分の調子を狂わす張本人に彼氏の存在がバレでもしたら……と思うと、梓はその後の唯からの反応に憂鬱を覚えずにはいられなかつたのだろう。

結局のところ、事は本人の知らぬ間に露呈して唯の記憶にインプットされてしまつたのだが。

「あ、でも」

憂が何かを言いかけた。唯は「ん？」と返事をして憂の方を見る。「最近ね。梓ちゃん、ちょっと元気なかつたみたいなの。部活は楽しつって言つてたから、多分だけ彼氏さんと何かあつたんじゃないかなって思つてたけど

聖なる夜は、万人の夢を叶える為にあるわけではない。商戦よろしくお祭り騒ぎに興じるのは極小数の国のみであるし、サイレントナイトに相応しい過ごし方をする方が本来ならば歓迎されるべきなのだろう。

ところで平沢家では、十一月二十四日のクリスマスイブを姉妹仲良く過ごしていた。

「憂は好きな人とかいないの？」

夕刻、ふたりでコタツに入つて談笑をしている最中、唯が突然そんな事を言った。

「え？ わ、私？」

「うん」

憂は考える。「いない」と言えばこの件についての会話はそこで終わるだろう。実際、彼氏にあたる人物はいない訳だし。だが仮に「好きな人はいる」と答えたなら、唯はそれが誰かを聞き出すまで話をやめないだろう。間違つても本人の前で「その……お姉ちゃんが」とは言えないであろうから。

「……いないかな。いまはお姉ちゃんと過ごすクリスマスが楽しいから、それがいいの」

顔を少し紅くして唯から目をそらしながらそう言つと、そんな嬉し恥ずかしな事を言われた本人は目をつぶつぶさせて「妹よ！」と叫んでは憂に抱きついた。

「お、お姉ちゃん……くすぐつたいよ」

だけどそんな唯が、憂は嫌いじゃない。むしろ大好きだった。

「憂、ういいー」

頬つぺたをすりすりし出した姉から直に伝わる体温に心地よさを感じながらも、憂は「もう……」と苦笑いで唯から離れた。「ふえ、ういい……」と言いながら不満そうに頬を膨らます姉に対し、憂は時計を見てこう言つた。

「そろそろ時間だから、ご飯食べに行こつよ、お姉ちゃん」

「うお、もうそんな時間か！」

すると唯は途端に元気を取り戻し、支度をしに部屋へと戻つて行つた。

「現金だなあ」

と憂はまた苦笑しながら、自分も支度の為に一度部屋へと戻つて

行つた。

「お待たせ」

梓は待ち合わせ場所に立つひとりの男性に声をかけた。時刻は夕方五時、宵の口ともなれば辺りのきらびやかなクリスマスのイルミネーションがより一層輝きを誇示し始める。そんな光の中に、彼はいた。

「待つた？」

「全然」

極一般的なカップルの会話は、これから約束される聖なる夜と言う道を歩く為のパスポートのようなもの。もしもこの物語の続きが、『ふふっ、と女の子が笑つて、

「じゃあ行こうっ」

と男性の腕を取つて歩き出した。』

……とでも言つのならば、幸せな夜になるだらうけれど。この子たちほどやり、少しだけ様子が違うようだ。

「行こっか

神妙な面持ちのままふたりは歩き出す。しかし、その手と手同士が交わる事は、ついて無かつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6473z/>

けいおん！先輩とあずにやん

2011年12月21日21時53分発行